

第14回 双葉町復興推進委員会 議事概要

■日 時 : 平成27年1月27日(火) 午後1時00分～4時00分

■場 所 : 双葉町いわき事務所 2階大会議室

■出席者 : 別紙座席表のとおり

■議事概要

1. 開会

2. 町長あいさつ

3. 議 事

(1) 中間貯蔵施設の施設受入判断について (報告)

資料2に基づき、伊澤町長より報告。

(2) 第13回双葉町復興推進委員会グループ討議における主な意見内容と、意見を踏まえた取組の方向性について

資料3に基づき、事務局より説明後、質疑。

委員の主な意見は以下のとおり。

- 「取組の方向性」の中に双葉町商工会がやるべきことがあるが、少ない職員で通常の業務をしながらこれらのことに取り組むのは大変である。町からも絶大なる支援をお願いしたい。
- 「取組の方向性」に「国に要請・要望」とある。一理あることだが、町が主体となってどう動くのかが問われる。
- 町が国に要請・要望していくことに関して十分理解できるが、国や県の制度だと言っているのは埒があかない事項や、時期が遅すぎる事項がある。住民に一番近い立場である町はそこを理解し、具体的な方策を1件でも多く出してほしい。
- いわき市平に大熊町の交流拠点ができたと聞く。他町を例に出すのは失礼であるが、大熊町で実際ここまで進んでいる。資料の中では「復興公営住宅の整備後の施設の配置のあり方についても検討」とある。双葉町が遅れているのは認識しているが、後手になるのではなく、もっとスピーディに実施してほしい。
- 交流拠点の設置のあり方はどうなのか。集会所があるだけでなく、集合型の拠点として実施してほしい。
- 「名産品の復活」はどこでやろうとしているのか。
- 町の名産品復活事業は、今年度も企画し実施中であるが、「双葉町の名産品」については、位置付けが難しい。もともと双葉町で家庭で食べていた漬物などを、避難している若い人に継承していきたいので、レシピ

を公開することが考えられる。

- 商工業者でも、双葉町で名産品を製造していた菓子店があった。その菓子を全国で「双葉町の名産品」として認知させることを考えている。現時点では準備段階であるので、良いアイデアがあれば教えてほしい。観光協会としてもやりたい。
- 仮設住宅の敷地内に空き地があるが、特産品の生産のために使ってもよいのではないか。商工会をうまく動かしながら名産品を作り、どこで作るのか、どこで販売するのかを考える必要がある。
- 施策の数が多すぎる。どれが重要か判断すべきである。
- 双葉町立学校へ見学に行った人から、子どもも先生もいきいきとして感激したという話を聞いた。町立学校の良さをアピールするには、実際に見てもらふ機会が必要だ。何かの行事で見る機会はあるが、それは関係者だけである。一般町民も見られる機会があるとよい。「百聞は一見にしかず」と言うが、それがキーポイントだ。
- 教育長のメッセージ発信は、今後も継続すべきである。
- 白河で夏休みに福島大学の学生が、子どもたちの遅れている勉強を指導する手伝いをした。子どもの親たちが喜んでいて、今年も開いてみたい。
- 健康手帳を、母子手帳のような形で経過が分かるものを作ったらどうか。住所・主治医が変更してもそれを1冊持っていれば分かる。
- 高齢者の健康状態が悪化している。健康ノートを持って、転居先でも医療機関が変わっても、それ1冊で緊急連絡先など全てが分かるようにする必要がある。
- 町民の健康等の情報を管理できるようなシステムを作る必要がある。検診データファイルをそこに重ねていくようなものである。その人ごとにファイルがあり、どういう最期を迎えたいのか、ということも含めて分かるものがあればよい。
- 町立学校のPRに関連してであるが、再開した双葉町立学校の施設設備や先生が良いので感銘した。他町村と比較して立地も良い。「リトル双葉」ではないが、各種施設が集まっている感もある。就学前でも関心が高い。教育長がメッセージをホームページで発信しているが、子どもたちに集まってほしいのであれば、そのようにするのがよい。

(3) 双葉町復興まちづくり長期ビジョン（中間報告）に対するパブリックコメント等の意見とその反映の方向性について
資料4・5に基づき、事務局より説明後、質疑。
委員の主な意見は以下のとおり。

- 町内復興拠点の模型を作ったら良いのではないか。「もの」が無いと分

からない。構想を紙で記載しても分からない。

- 模型作りに関してCG（コンピュータグラフィック）ならいくらかでも修正ができる。例えば、双葉駅前の現在の写真を撮影し、将来像がどうなるのかという例を重ね、さらにステップを経て修正し、最終的なものができればよいのではないか。イメージが先に必要だと思うので、そのような手法でやったらどうか。
- 模型は発泡スチロールでコストをかけずに簡単できるのではないか。
- 模型は早急に作るべきだ。町は最終形ができるまではあまり作りたくないと考えているので、随分先になる。ある程度の区域が分けられ、理解できるものであればよいということではないか。コストがかからないものを作ってほしい。
- 町内復興拠点の「周辺市町村との連携」についてであるが、「福島12市町村の将来像に関する有識者検討会が12月に開催される」とある。この会議の意味と行政に与える影響度は何か。「(将来像検討に当たっての) 論点ペーパー」では2020年をターゲットとしているようだ。果たして2020年で終わるのか、その先はどうするのか、復興庁にスタンスを聞きたい。
- 「福島12市町村の将来像に関する有識者検討会」のスケジュールを詳しく聞きたい。いつ結論が出るのか。その間に何回くらい検討会が開かれ、どのようなスケジュール感でやっていくのか。
- 復興庁のホームページには「福島12市町村の将来像に関する有識者検討会」の「将来像検討に当たっての論点ペーパー」としてインフラ復旧、産業振興、健康医療、住環境設備、教育育成、環境促進等についてかなり詳しく掲載されている。「福島12市町村の将来像に関する有識者検討会」の意に反するものを復興推進委員会が出して良いのかが、心配である。次の復興推進委員会では、論点ペーパーの内容を委員へ配布してほしい。
- 福島県の方が2020年以降の長期ビジョンについて説明したが、県知事が町の意見を反映しながら進める、ということで期待したいが、どのようにやっていくか、という手順に不安を感じる人は多い。復興集中期間が来年度までと言われているが、それ以降どうなるのか、不安に思っている。財政的な裏付けがあって実施できるようにしてほしい。
- 双葉町としての帰還宣言の条件であるが、どこまで整ったら帰還できるのかと、復興推進委員ということで町民から質問される。長期ビジョンを決めても意味がないのではないかと、とも言われる。双葉町をなくすわけにもいかないので、町は長期ビジョンを決めて、今は具体的なことを

決めている、と説明している。そうすると、双葉町はどういう条件でなら帰れるのだ、と言われるが答えられない。双葉町には中間貯蔵施設や廃炉、放射線量の問題もある。

- 町内復興拠点の模型であるが、学識者委員の先生方に、実現可能かどうか聞きたい。
- 町内復興拠点の模型は非常によいアイデアだ。模型よりも実現性が高いのは、グラフィックCGである。CGの方が模型よりもわかりやすい。昔の町並みを再現し、津波が来た時にどのように浸水するかも分かる。現状の町と、これから復興に関わっていく大まかなエリアについて、どのような施設が考えられるか論議が進む。論議の過程で修正もできる。町民はタブレット端末も持っているので、町として（案を）配信し意見を聴取すると意見が集まるのではないか。
- 特に県外におけるこれからの復興支援員と町民の関わりはどうか。
- せっかくタブレット端末があるので、ホームページなどで復興支援員が、町民の活動や復興支援員の考え方についても掲載すべきではないか。
- 津波被災地域における復興時期の明示は難しいのではないか。
- 帰還や賠償はいつまでなのかが何も出てこないのに、本当に復興ができるのか。「信用できない」という人が結構いる。やらなくては仕方がないが、実現できると自信を持ってきちんとと言えるのか。
- ここに書いてある「海岸堤防の整備は平成30年」「海岸防災林の整備は平成32年」といった時期は、確定なのか。机上の空論の目標なのか。実際はどうか。
- 帰還や賠償の時期をはっきり示し、先が見える対応をしてほしい。
- 津波被災地域復興小委員会では、浜野・両竹地区の復興が双葉町の第一段階の復興であると認識している。長期ビジョンの大事な根幹は、「復興の見える化」をどうするかを町民も含めて国・県にPRすることだ。
- 資料4の3の「町外における生活再建」で、人（町民一人一人の復興）と町の復興とを両輪で進めるのはよい。復興着手期は、津波被災地域の復興を第一として、事務局から5～10年を目標としてはどうかと提案があったが、それに賭けるというのはどうか。そうでないと進まない。現実には厳しく、交渉が始まるかも分からないが、明るい兆しが見える書き方にしてほしい。
- 復興事業の実施時期について5年ごとでも、3年ごとでもよい。
- 補償をきちんと出してもらえれば、10年後の目標についても住民もある程度は納得すると思うし、補償が見えてくれば合意もスムーズにいく

のではない。何にも示さないでは進まない。

- 平成30年度に海岸防災林整備の完成の目標が示されていないと、あのような地域に安心して住めないだろう。せめて平成30年に完成するまで我々の生活をどうするのか、考えて欲しい。
- 復興産業部会では、平成30年度、平成32年度という目標時期から逆算して何ができるのかという話が出始めている。できれば時期的なものを入れてもらえると、復興産業部会からの報告としてありがたい。
- 委員会として、復興着手期の目標は、5～10年後とすることとしたい。
- パブリックコメント等でコメントをした人が、(自分が出した意見について) 何がどう反映されたのかが分からない。反映結果を(報告書とは別に) 1枚にまとめて示した方がよいのではないか。(報告書の中で) 一緒にまとめてしまうとわからなくなる。
- 県と国に対する要望事項については、分けて記載しても良いのではないか。

(4) 今後の検討課題について

資料6に基づき、事務局より説明後、質疑。

委員の主な意見は以下のとおり。

- 復興産業部会が立ち上がったが、それ以外にも県外避難者に関する部会についても立ち上げて、その人たちでしか分からない課題や問題もあるので、集まって話し合う必要がある。
- 復興公営住宅も入居者だけでなく、商業施設に関わる人やイベントを行う人など関係者が集まり討議する必要がある。それぞれ部会を立ち上げて進めていった方が、活発な意見がいろいろ出る。現に、復興産業部会では活発に意見が出て、今後のことについても前向きに進んでいる。
- 町の復興は実現することが前提にある。復興はできないのではないか、という意見もある。そういう人の意見を聞きながら、そこにも広報はしていかななくてはならない。考えについても深い理解を求める必要がある。
- 理想と現実のギャップがある。高い理想(の実現)に向けて挫折することなく、厳しい現実から目を背けることなく、ギャップを埋めることを我々はやっている。その中で、これだけの方向性が出て、検証していく必要がある。そのためには、細分化して現実的にできるのか、短期的にはどうかと、小委員会で検討した上で、全体的な調整として本委員会に戻すというのがよいのではないか。
- 復興推進委員会の議論は前向きな意見が多く感銘を受けた。しかし、町民には不安感もあり、内容がまだ理解されていないこともある。「実現

できるかもしれない」と思ってもらうことが必要だ。

- お金をかけて業者に発注するよりも、ジオラマは学生や町民に手伝ってもらったり、ワークショップのように開催するなどすれば、町民に現実感を持ってもらうことができる。委員会での進捗管理も必要だが、町民のギャップを埋めるような参加も必要だろう。

4. 閉会

以上

第14回双葉町復興推進委員会座席表

(敬称略)

高野	間野	伊藤
陽子	博	哲雄

1 日時 平成27年1月27日(火)
13:00~16:00
2 場所 双葉町いわき事務所 2階大会議室

課長 駒田 義誌	事務局 町長 伊澤 史朗	齊藤 六郎
課長補佐 細澤 界	復興推進課 副町長 半澤 浩司	菅本 洋
主任主査 橋本 靖治	教育長 半谷 淳	
副主査 山下 明弘	事務局 総括参事 武内 裕美	田中 勝弘
主事 西牧 孝幸	復興推進課 総務課長 船来 丈夫	福田 英子
支援員 米山 治介	秘書広報課長 平岩 邦弘	
支援員 山中 啓稔	事務局 復興推進課 税務課長 山本 一弥	横山 敦子
支援員 由波 大樹	産業建設課長 猪狩 浩	小畑 明美
支援員 小山 勲	住民生活課長 松本 信英	中谷 博子
議事事務局長 山下 正夫	健康福祉課 主幹 熊 豊子	松本 浩一
会計管理者 半谷 安子	教育総務課 主幹 阿部 裕美	山本 真理子

丹波 史紀	復興庁 八木 俊樹 企画官
長林 久夫	復興庁 石川 義浩 参事官補佐
木藤 喜幸	復興庁 福島復興局 高橋 直人 次長
相楽 比呂紀	復興庁 福島復興局 高橋 忠信 参事官
	復興庁 福島復興局 掛川 昌子 参事官
石田 恵美	復興庁 福島復興局 須田 亨 参事官補佐
小川 貴永	福島復興局 いわき支所 林 文之 次長
	福島復興局 いわき支所 桃原 信明 参事官補佐
谷 充	福島県 避難地域復興課 佐藤 庄一 総括主幹兼副課長
高田 秀文	福島県 避難地域復興課 駐在員 熊坂 雅彦 副課長
	福島県 避難地域復興課 根本 朝彦 主査